

むすんでひらけ

札幌むすびば窓口便り 第 21 号



2013.07.20 発行
TEL 080-5720-0891
Email: info@shien-do.com
編集・むすびば受付チーム

特集 三年目のむすびば

当事者が声をあげる夏

むすびば共同代表 みかみめぐる

長期化する支援活動の中で

2011年3月11日、12日と東北を襲った大震災や原発事故の被害を憂慮した市民達が3月16日に緊急集会をもち、3月25日には支援活動を行う団体が正式に発足。それが私たちむすびばのはじまりでした。

それから2年4ヶ月。むすびばは常に目の前の課題と向き合いながら、様々な支援活動を展開してきました。

全国でも類を見ないむすびばの多様な活動スタイルが生まれた背景を考えると、普段の札幌の市民活動の多様性がこういう緊急的な災害支援の場にも生きたのだと思います。また、避難して来た方が早い段階からむすびばの活動に加わったことで、被災者、避難者が抱えている問題が支援活動の中に常に具体的に見えていることも大事な要素となりました。

しかし、それにしても被災者が抱える様々な問題は解決するどころかどんどん複雑になり、人々の善意だけでは到底支えきれない深い闇が広がっていることも事実です。

NPOも支援活動が長期化していくことで、心意気で動く時期から計画を練って動く時期に移行してきたことは確かです。

放射能の汚染度が高い地域からの夏休みや冬休みを利用した一時的な保養受け入れ活動を行う団体も、資金調達

に頭を悩ましているのが実情です。

今年5月、福島県内や栃木県北部で現地相談会を地元で支えているお母さん達のグループが各地から初めて集まり、北海道、新潟県、岩手県、山形県、東京、山梨県、岐阜県、愛知県、京都、兵庫県、岡山県からも受け入れ活動団体が参加して「311受入全国協議会」の会合が郡山市で行われました。

放射能のことで悩んでいることを普段はなかなか声に出しづらいというのがどこの地域でも共通の悩みでしたが、熱心に話し合う中で「そういう実情をもっと一緒に話し合う中から保養に出かけること自体が堂々で行われるようにしていきたい!!」という目標が確認されました。

そして被災地側のワーキンググループとして「送り出しチーム・みんなの希望」というネットワークが誕生しました。

三年目の避難生活者の声

7月15日、札幌市の厚別区民センターではむすびば・くらし隊こだまプロジェクト主催による「住宅支援から見る被災者・避難者のいま」という学習会が行われました。責任者の穴戸隆子さんが書いたチラシの文章を引用します。



7月15日こだまプロジェクト「住宅支援から見る被災者・避難者のいま」

伝えたい、 知ってもらいたい

福島原発事故は終息していません。

復興が力強く叫ばれるその影で、汚染や補償による分断、健康への不安、それぞれの認識の違いや周囲の無理解など、原発事故に関わる被災者・避難者を取り巻く環境はより厳しくなっていると感じます。2014年3月で、避難者の住居支援が打ち切られる可能性があります。

当事者である避難者が出来ることは何か？なぜ、事故から2年以上が経過した今も支援が必要なのか？札幌の方に知ってもらいたいこと、避難者が知らなければならぬこと。SAFLANの福田弁護士を招いて皆さんで考えたいと思います。

沢山の避難生活者が集ったこの日の学習会では熱心な質疑応答があり、関係機関に要望書を出すことが決まりました。当事者があちこちで声を上げ始めた夏です。

くらし隊 報告

避難者自らが 主体となった支援活動

及川 文

福島原発事故後、福島や関東、東北から北海道への自主避難者が一気に増加し始めたのが2011年夏。その6~7割は母子避難でした。その年の秋、若い自主避難者のお母さんたちが、自分たちも自主的に活動を始めたいと動き始め、それをサポートする目的で生まれたのがむすびば・くらし隊です。被災者、支援者という区分を取り払い、ともに活動しながら、今後の支援の在り方を探っています。くらし隊は次のように各チームで構成され活動しています。

○こだまプロジェクト

自主避難者自治組織の代表である穴戸隆子さんが中心となり、避難者のその時その時の声を届け、問題を共有し、今後の支援のあり方を考える活動をしているプロジェクトです。

第1弾：2012年4月15日、「届け避難者たちの声～北海道在住原発災害避難者による公開座談会」。

避難者自身による率直な討論は、各方面から大きな反響を呼びました。

第2弾：2012年9月9日、「原発事故子ども・被災者支援法・学習会 わたしたちの未来をつくるために」。

支援法の理念を学ぶとともに、具体的な支援の内容を避難者支援者双方で

話し合う場としました。

第3弾：2013年3月11日、「むすびば311フォーラム 見つめなおす福島・それぞれの選択」。南相馬市から被災地で活動続ける高村美香さんを招き、北海道在住避難者で支援活動をしている方々も交え、それぞれの苦悩やこれからの在り方を考えました。

第4弾：2013年5月19日、「福島で支援を続けるということ」と題し、伊達市霊山町りょうぜん里山がっこうの関久雄氏の講演会を開催、福島の現状を伝えていただきました。

また7月14日は飯館村の青年を札幌に招き「までいな対話・札幌編」とし、分断を乗り越え、その後をどうするかを話し合い、考える場としました。

7月15日は「住宅支援からみる被災者・避難者の今」と題し、SAFLAN（福島の子もたちを放射能から守る法律家ネットワーク）の福田健治弁護士を講師として招き、避難者を取り巻く環境を法律的な立場から一緒に考えました。

○マザートウリー

自主避難者の若いお母さんたちが、自分たちの生活を見つめる中で自主的に活動を行うチーム。

2012年2月に手作り味噌講習会、2012年4月10日に「北海道の食の安全についての学習交流会」、2013年7月13日に「オータナティブ&ナチュラルパシー～被爆から身体を守る方法～開催。食を中

心に、癒し、デトックスなど、日常生活に直結した部分で、より良い方向を目指して活動しています。

○みさんがチーム

2011年5月から、ずっとミサंगा製作を軸として活動を続けているチーム。震災直後に宮城県気仙沼市に支援に入った大工チームが託された被災地のヒノキと、北海道のミズナラの木か



らウッドビーズを作り、その両方を編み込んだ結みさんがを製作。売上から経費を除いた金額を支援のための募金としています。募金先はむすびば・うけいれ隊やはかーる・札幌など。これまでさまざまなイベントに出店、ワークショップなども多数行っています。

○キルトチーム

2011年12月から2013年4月まで活動したチーム。北海道各地や全国へ、福島から非難した方々の声を伝える布メッセージ「あすへのてがみ」を製作。避難者150人、支援者119人がメッセージを直接布に書き込み、製作に係ったボランティアは約100人。



中央の刺繍は避難した子どもの絵が原画です。このキルトは2012年2月10,11日に福島で開催された「放射能からいのちをまもる全国サミット」で展示。同年3月11日札幌市民ホール「いのちをつなぐ 明日を考える 311メモリアルイベント」、同年6月ブラジル・リオ+20市民NGOフォーラムやNYなど、様々な場所で展示されました。



こだまプロジェクト第1弾：2012年4月15日、「届け避難者たちの声～北海道在住原発災害避難者による公開座談会」

初動の物資支援から
子ども支援へ

飯田 知樹

誕生

3月16日：80名を超える札幌市民が、東日本大震災の被災者への支援を呼びかける集会に参加。

3月25日：東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌（通称・むすびば）発足

3月28日：被災者の受け入れチームの初会合。名称「うけいれ隊」に決定。隊員8名でスタート。

4月1日：人と物の登録DB作成
物・登録第1番：煙突式石油ストーブ
避難者・登録第1番：宮城県気仙沼からの避難者



当初の活動内容

住まいサポート（住居支援）：避難相談・避難先住居の選定・公営住宅入居のための条件提示

生活必需品の提供（物資支援）：市民から提供される家財・家電・生活必需品の提供と運搬

よろず相談（生活支援）：生活不安・教育・病院紹介・避難者さん同士をつなぐ・専門家への取り次ぎ

データ（佐々木）

1. 対応している家族数：335 家族（うち戻った家族数：36 家族 転出（海外含む）：14 家族 半年未満の短期避難：8 家族）
2. 市民からの物資提供情報数：5541 品（累計）
3. ボランティア登録数：196 人
4. 提供者数：948 人
5. 配送済み：（2011年）2771 品（2012年）1278 品（2013年）93 品 累計 4142 品

物資・相談・リフレッシュ
託児（佐々木）

物資の届け先：

- 2011年度：新規入居者
2012年度：新規入居者・家族構成が変化した家族（夫が札幌に合流・赤ちゃん誕生）・経済的に苦しい家族
2013年度：新規入居者・家族構成が変化した家族

相談：

避難3年目に入り、避難者との交流を望む家族と距離を置きたい家族が明確に分かれてきている。

相談内容によって、相談先を避難者団体・支援団体と使い分けているようで、相談の多様性にある程度対処できていると思われる。

深刻な問題に関しては、避難者団体・支援団体・行政・専門家が一同に会して、ケーススタディ・対応策の検討が必要と感じている。

リフレッシュ託児：

主に母子避難で子育て・育児に疲れている母親を支援するために、子どもを預かり母親に息抜きの時間を提供するのが目的。

5月から月2回実施し、7月30日現在での利用者累計は、

家族数：23 家族 預かった子どもの数：26 名 保育ボランティアスタッフ：25 名
厚別区以外の、支援の手の薄い地区からの利用者が多数を占める。

札幌市各区で定期的に開催できるよう、他団体の力を借りて会場確保に努めている。

一時保養の実施（尾形S）

被災地では原発災害以降今だに、屋外で自由に遊ぶことができない子ども達と、子ども達の低線量被ばくによる健康被害を気遣い悩んでいるお母さん達が大変なストレス状態に置かれています。安全な自然や食材に恵まれている札幌で保養することで、リフレッシュしてもらうために実施しています。実施に関しては多くの市民ボランティア、企業、各種助成金に支えられて実施してこられました。

これまでに係った一時保養：

- 札幌で冬休み** 2011（むすびば主催）
期間 12月23～30日 福島の小中学生の保養プロジェクトのサポート。
- さっぽろで春休み** 2012（むすびば主催） 期間 3月23日～3月30日 参加者 21 名
- 北の大地に会いに行こう夏** 期間 平成 24年7月30日～8月7日 星槎学園と共催 参加者：福島の子ども達 29 名、保護者 2 名
- 北の大地に会いに行こう冬** 期間 平成 24年12月22日～12月28日 星槎学園主催うけいれ隊協力 参加者：福島の子ども達 20 名、保護者 2 名
- さっぽろで春休み** 2013 期間平成 25年 3月23日～3月30日 参加者 45 名。
- さっぽろで夏休み** 2013 期間平成 25年 7月21日～7月29日 参加者 40 名。で実施予定。
冬休みの実施も計画中です。これからもご協力をお願いいたします。

キッズハウスの実施
（飯田）

被災地では遺児となった子どもたちのための「グリーンサポート」の場が作られています。子どもたちが遊んだり発散したり静かに過ごしたりと思いい思いの時を過ごす中で、研修を受けた「ファシリテーター」がひとり一人の子どもに寄り添い、その子それぞれに前へ進んでいくためのサポートを行います。避難・移住して来た子どもたちも、肉親・故郷・友人・ペット等身近だった人や・もの地域から離れ、その子それぞれのグリーンを抱えています。グリーンサポートの場がここ北海道にないことを知った私たちは、2011年12月から準備を始め、さまざまな人の力を借りて、2013年2月からグリーンサポートの場としてキッズハウスを毎月第1日曜日に実施しています。

終わりに

うけいれ隊も来年3月に解散することになっています。でも、これまで続けてきた「リフレッシュ託児」「一時保養」「キッズハウス」等は、要望のある限り継続していけるよう検討していくことになっていますので、今後とも応援よろしくお祈いします。

むすびば受付 報告

大きくゆるやかなつながり の中で

米永 あきえ



2011年4月、開始時の頃のむすびば受付コーナー。

エルプラザの「むすびば」受付には、手書きの日記があります。これはむすびばのはじまりからずっと続いている、受付を訪ねて来られた方たちへの対応記録です。はじまりのころの忙しさはその筆跡からも伝わってくるようですし、時とともに変化する相談内容は、そのまま受付チームの役割の変化です。

受付チームの一員としてむすびばの活動に参加している誰もが、はじめはこの日記に相談者、として登場します。「自分にできる支援があれば」とエルプラザを訪ねて来たのです。1週間の

うち1日でもかまいません、エルプラザの受付コーナーに座ってもらえますか、というお願いに答えることができたのが今のメンバーです。

こうして震災直後の忙しさはなくなっても、イベントや相談会・報告会の準備や当日スタッフとして、また時には印刷・製本作業、そして頻繁ではなくともエルプラザを訪ねて下さる方たちへの対応と、これまで常に目立たないところでお手伝いをしてきました。

そして最近、気がついてみるとメンバーのひとりひとりが、キッズハウス

で、はかーる札幌で、被災現地で、あるいは個人的なお友達として、それぞれのかかわり方を始めているのです。

「むすびば」という大きくゆるやかなつながりの中で、それぞれが、より自分にふさわしいかかわり方に自然にたどりついたということではないでしょうか。

むすびばが立ち上げられて以来の受付チームの活動を改めて振り返る今、このように感じます。



岩手・福島で7回、延べ38日間にわたり支援活動 健康棒楽々マッサージ 各地で大好評！

富塚 廣

いやし隊 気功チーム 報告

指導員養成講座も実現し、81人の指導員が誕生

札幌を中心に毎週8つの気功教室を開催しているハーモニー気功会(代表・小山内和子)は、気功を通じて被災者の健康保持に少しでもお役に立てればと、むすびばくいやし隊>気功チームを結成し、“健康棒楽々マッサージ”のワークショップを避難所や仮設住宅で行って来ました。

第1回目は3・11大地震直後の4月29日から5月7日まで、岩手県大槌町・花巻市で活動を展開しました。岩手県下では陸前高田市に並ぶ大きな被害を出した大槌町の町は跡形もなく瓦礫の山が延々と続いていました。避難所となった小学校や神社、お寺でのワークショップは、避難生活の長期化

で体調を崩される方も多く、体も気持ちも楽になったと大変喜んでいただきました。

2回目は10月28日から11月5日まで、同じ大槌町と花巻市、新たに釜石市にも入りました。みなさん、仮設住宅に移っておられましたので、集会所に集まっていたいただき、ワークショップを行いました。健康棒楽々マッサージは、身体をほぐすだけでなく、一緒に身体を動かすことで、心もほぐし、おしゃべりをはげませ、心の奥底からの笑いを引き出す、そんな効果を確認できた2回目でした。

3回目の昨年2月、初めて福島に入り、見えない放射能から身を守る免疫力アップのワークショップを行いました。

その後も福島県や岩手県で活動を展開、今年の6月までに延べ7回、38日間、44カ所でワークショップを実施しました。

「健康棒楽々マッサージ」はどこでも大好評で、被災者の皆さんの心と身体へのケアという面で大変有効であったと思います。

昨年は札幌市のさぽーとほっと基金の支援で「健康棒楽々マッサージ」のDVDを制作し、生活支援員の皆さんを対象にした「指導員養成講座」も実現しました。これまでに81人の指導員が誕生し、大槌町の小鉾川流域の仮設住宅では月2回のお茶っこサロンのなかで健康棒マッサージが実施されています。

今年11月にはまた、大槌町に入ります。新たに、釜石市でも指導員養成講座を実施する予定です。仮設住宅での暮らしは3年目に入りましたが、なかなか被災者の眼に復興の姿が見えて来ていません。そんな中ですが、引き続き支援活動を続け、皆さんを元気づけることができると考えております。

むすびば 情報。出版 報告

むすびば活動全体の バックエンドを支えて

安倍 隆・長谷川 謙

むすびば情報チームは、むすびば設立当初からのチームです。

むすびばの主要な活動目標であった「ネットワークの構築」に必要な、メーリングリスト(以後ML)、ホームページを運用・管理することを主要な任務として結成されました。

MLやホームページ管理からスタート

当初311大震災直後、たくさんの市民がむすびばに集まり、メーリングリストは一気に200名を超え、しかも多くの情報を皆でやり取りしたため、管理していたサーバ業者に「容量オーバー」で切断される事件まで起きるほど、むすびばメーリングリストは、札幌における支援活動で大きな役割を果たしました。この事件では、緊急に立ち上げていたホームページもお釈迦となり、度重なる徹夜の記憶が呼び起されます。

メーリングリストはハイスピードでその参加者を増やし、現在は400名を超え、この一年間はこの数をキープしています。

「むすびば」という組織は、被災地・

被災者や避難者の状況が変化するたびに、それぞれの課題に対応するようチームの再編を繰り返してきました。それに応じて、むすびば全体を網羅した全体MLの他に、各組織、各チーム内をつなげるMLの作成・管理が情報チームの新たな仕事として追加されるようになりました。

ホームページの管理も引き続き継続され、300件を超える更新がこの2年4カ月の間に行われました。Facebookの並行して開設・管理・更新が行われています。

出版物を通じた支援に

むすびば結成からほどなくして、避難者自身がむすびばに加わり、支援活動を共にする中で、支援の輪を全国に広げていくこととなります。

そこで情報チームには「出版」という役割が追加されました。むすびばリーフレットだけでなく、中手さん吉野さんの講演録、こだまプロジェクト

の報告冊子、そして広報の為のパネル作成。これらの作成には、講演会等の録音、ビデオ撮影、写真撮影、音声からのデータ起こし、データのチェック・修正、組版、印刷、製本と時には情報チームスタッフの作業が主に、時には外部スタッフに請け負っていただき、時にはむすびばスタッフが集まっての作業と、様々な場面での協力体制の中で冊子は完成し、全国へ配布され、被災者支援の底支えを果たしてきたのではないかと感じています。



最初のむすびばホームページ。デザインが不評で作り直しとなる。



現在のむすびばホームページ。



Facebookでも公開、運用

ちびっこランドを母体として 支援活動に参加

NPO法人おーるまいてい代表 高屋敷 敦嗣

おーるまいていの活動は、保育所ちびっこランド屯田園の母体がある中で、活動の為、月一の運営委員会に参加させて頂き、勉強させて頂いている状態です。

2012年11月10日(土)から11日(日)に福島会議に参加させて頂き、実際の現地を体感しました。

何も札幌とは変わらない福島。

見えない放射線量は高く、怖いものがあるが、疑問・憤りを感じました。

現地の方々や、支援の方々との交流を持てた事に感謝します。

2012年12月9日(日)福島在住障がい児・者と親子を対象とした札幌市での保養プログラムにて、夕方から

参加しました。

震災後の大変な時に、少し手がかかるお子様を育てる日々の生活の中で、母親のとても大きなストレスがある事がわかりました。

子どもを母親から離して、母親との会話の中で、普通の話をするだけでしたが、話しを出来た事で、少しリラックス出来たのではないかと思います。

短い時間でしたが、楽しい一時と出会いに感謝したいです。

これから定期的に交流し、より多くの方々とお話する機会が必要だと思います。

あぶくま便り9 福島より

昨日、あるイベントでたまたまお話しした40代くらいの男性。

福島県内の高校を卒業して、京都の大学へ行き、昨年まで埼玉県内でお仕事をしていたそうです。ご両親が高齢になってきたことなどあり、お仕事を辞めて福島に戻ってきたということでした。

「放射能のことさえなければ、福島はいいところですよ。」という私に対し、「放射能があってもいいところですよ。」と言われ、なんと答えてよいかわからなかったのです。(ぼ)

おーるまいてい
報告

みみをすます
プロジェクト
報告

もっと太く、もっと強く、
現地と繋がっていく活動

NPO法人 みみをすますプロジェクト (申請中)
みかみ めぐる

◆発足の経緯

「みみをすますプロジェクト」はそもそも「くらし隊」が現地活動をしていく流れの中で誕生していきました。2011年10月にむすびば(くらし隊)は初めて福島県に出向き、街角での「小さな相談会」活動をスタートしました。最初は福島市でしたが、翌月にはぜひ来て欲しいという声上がり、郡



山市や須賀川市へ。スタバやファミレス、区民センター、家具のショールーム、等々、3人4人のメンバーで小回りのきく相談活動を展開。原発事故の

むすびば商店は、むすびばの活動が1年目を終えようとしていた時、それまで手がけたいと思いつけながらも具体的な活動に結びつけることが出来ずにいた『被災地の障がい者を支援する活動』を具体的に進めていくために立ち上げたチームです。

最初に手がけたのは、むすびばオリジナル商品(クリアフォルダー)の作成です。マツト和子さんが作って下さったデザインを使い被災地の障がい者施設に依頼し製品化したいとの思い、ホップの竹田保さんに通じて紹介していただいた岩手県花巻市にある障がい者施設「るんびに美術館」にお願いし製品化することが出来ました。

その後は、福島、花巻、仙台の障がい者施設を訪問し、震災後も懸命に仕事に取り組んでいる障がい者の作品を買い取り、札幌で販売する活動を続け

被害を受けた現地で、避難や移住、保養などの相談に対応しながら実感したのは、みみをすます活動の重要性でした。必死に話しをしているお母さんの傍らで、声を上げられない子どもたちを目の当たりにした時、もっと太く、もっと強く、現地と繋がっていく活動が必要なことに気づかされました。そして2012年2月11日、12日「放射能からいのちを守る全国サミット」を福島市で開催。むすびばはその運営の中心を担いましたが、これを大きな契機として「みみをすますプロジェクト」が誕生していきました。

◆発足から一年半の
活動内容

- ① 現地合同相談会や小さな相談会を継続的に運営・実施
- ② 福島県の中学3年生を対象にした学習支援付き保養プログラムを開発、実施(2012年度、2013年度)
- ③ 学校単位、学年単位で行う「移動



2012年実施の学習付き保養、つばさプロジェクト

教室」型のローテーション保養の実現に向けた取り組み

- ④ 札幌在住避難家庭への支援活動／「健康相談会」、「元気塾ユニオンハート」
- ⑤ 全国の受け入れ活動団体をネットワークし、被災地の市民と協働する組織「311受入全国協議会」を誕生させ、運営の中心を担う
- ⑥ 全国保養情報サイト「ほよ～ん相談会」の運営管理

被災地の障がい者を
様々な形で支援

てきました。

昨年12月には福島で生活する障がい児と家族2組を北海道に招き、札幌で避難生活を送っている障がい児を抱える家族と共に保養プログラムを実施することが出来ました。苦労もありましたが、多くの方にご支援いただき実施でき、次への希望につながりました。

今年度も福島で生活する障がい児、札幌で避難生活を続けている障がい児を対象とする保養プログラムの実施に向けて取り組んでいます。資金の確保が出来ず、実施の目処が立っていないのが残念でなりません。あきらめることなく努力を続けていきたいと思っ

むすびば商店
報告

佐藤 雅一

2012年12月、子どもたちを招いてのクリスマス保養を実施。

ています。

当面は、被災地の障がい者が製作した商品の販売を通じて、支援活動の必要性を市民に訴えていきたいと思

9月7日(土)に行われるエルプラまつりにも参加しますので、ぜひお越し下さい。

